

中学校英語科における CLIL 教育の実践と評価方法の検討

高橋凜太郎（佐世保市立大野中学校）
松元浩一（長崎大学大学院教育学研究科）
中村典生（長崎大学大学院教育学研究科）
長谷川哲朗（長崎大学大学院教育学研究科）

1. 研究の背景・目的

2020 年度からの小学校中学年における外国語活動と高学年における外国語科の教育課程の全面実施に伴い、2021 年度現在、中学校の外国語の授業はより一層の高度化が求められている。

ベネッセ教育総合研究所が行った中学生を対象とした英語に関する調査（参考文献参照）によると、「身近な話題について、その場で考えて先生や友だちに英語で伝える」という項目において、「よくやっている」という回答はわずか 14.2%にとどまっており、実践的な学習活動が少ない状況にあることがわかる。加えて、「身近な話題について、先生や友だちに伝えるのが楽しい」という項目においても、「とてもそう」と回答した生徒は 15%以下であり、生徒が興味・関心を持って意欲的に学習している状況が十分でないことがわかる。

このような状況に鑑み、筆者らは生徒が興味・関心を持って意欲的に英語学習に取り組み、より実践的な学習を可能にする教育方法がないかと考え、外国語の授業に他教科、他領域の内容を取り入れた授業形態 CLIL 教育(Content and Language Integrated Learning)について研究を行った。CLIL 教育は、生徒にとって興味・関心のある他教科の内容を取り入れることができ、社会的なテーマ等についても英語を通して実践的に学ぶことができるため、本実践研究において先に述べた現状の課題を解決できる可能性を調査、研究することにした。

併せて、国立教育政策研究所は、学習評価を児童生徒の学習や教師による指導の改善、及び学校全体の教育課程の改善等に生かす必要があるとし、児童生徒の学習評価の方法について検討することがカリキュラム・マネジメントの点でも重要であると述べている。

これらのことを踏まえて、研究テーマを標題に掲げる「中学校英語科における CLIL 教育の実践と評価方法の検討」とした。

2. CLIL 教育について

2.1 CLIL 教育の特徴

CLIL とは Content and Language Integrated Learning(内容言語統合型学習)の略称である。CLIL 教育は 1980 年代のカナダの immersion 教育の成功や北米の

内容重視の英語教育(CBI: Content-based Instruction)に触発され、1990年代初頭にヨーロッパで始まり、特にフィンランドにおいて早期に実践されてきた教育形態である。

笹島・山野(2019)は CLIL 教育について、教科科目やテーマの内容(Content)の学習と言語(Language)、特に外国語を組み合わせた学習(指導)の総称であると述べ、たとえば、英語を通して数学や理科に関わるテーマや教科科目を学ぶ学習形態であるという。彼らは CLIL 教育の特徴として次の 3 つを挙げている。

- (1) a. 学習内容(Content)にも重きを置き、学習者の思考や学習スキル(Cognition)にも焦点を当てている
- b. 学習者のコミュニケーション能力(Communication)の育成を目指す
- c. 学習者の文化(Culture)あるいは相互文化の意識を高める

(1a)～(1c)には C から始まる 4 つの語(Content, Cognition, Communication, Culture)が含まれており、CLIL 教育ではこれらを称して「4 つの C」ということがある。

(1a)は、学習者の興味・関心を引く他教科等の内容を取り入れ、その学習内容について学習者が思考を働かせながら学習を進めていくことを意図している。(1b)は、学習者が学習を進めるにあたって、自らの考えや思いを伝え合う言語活動を通してコミュニケーションをとり、伝えることの楽しさや嬉しさを実感できるようにすることを目指している。(1c)は、外国語を学習する上で外国の文化を知ると同時に、改めて自らの国・県・地域などの文化についても見つめ直し、互いの文化の違いを認め合うことができるような意識を高めることを意味している。以下、CLIL 教育の内容を概観したうえで、中学校英語科における CLIL 教育の実践と評価方法を検討する。

2.2 CLIL 教育の指導原理

笹島・山野(2019)は、CLIL 教育の指導原理として大きく次の 6 つを挙げている。

- (2) a. 英語と母語を一緒に使わない
- b. 英語で話すときは足場づくりをしっかりと
- c. 授業中の指示は少なく簡潔に
- d. 繰り返しの表現を使う
- e. 協同学習(グループワークやペアワーク)を重視し、多くのタスクを設定する
- f. 児童に考える時間を与える

CLIL 教育を活用するにあたって、英語を話したすぐあとに日本語で同じことを

説明してしまうと、生徒は日本語に訳されることを期待して英語そのものを聞こうとしなくなってしまう。そのため、英語と母語を一緒に使うことはできるだけ避けるようにしなければならないと笹島・山野(2019)は述べる。また(2f)において、小学校外国語教育における CLIL 教育の実践については、児童という言葉が用いられているが、CLIL 教育の理念や指導原理は小・中学校で不変であると考えられるため、本研究では(2f)の記述を中学校英語科における CLIL 教育の実践に読み替えることとする。

2.3 CLIL 教育におけるタイプの分類

山野・櫻井(2015)は、CLIL 教育を 4 つの観点から分類している。その 4 つの観点と分類は、次の図のように表すことができる。

図 1 CLIL 教育におけるタイプの分類

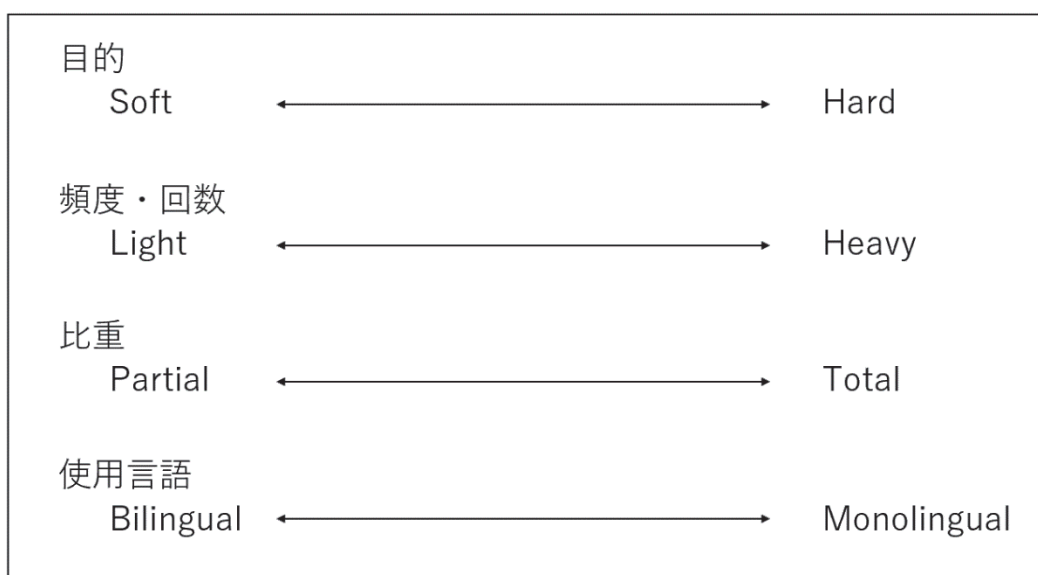


図 1 に示すように、CLIL 教育は、目的、頻度・回数、比重、使用言語の 4 つの観点から分類することができる。山野・櫻井(2015)によると、日本語と英語を例として考えると、目的は Soft と Hard に分類することができる。目的が Soft に近ければ、言語形式により重点を置いた授業を行うことになり、Hard に近ければ取り入れた内容により重点を置いた授業を行うことになる。頻度・回数は Light と Heavy に分類することができ、Light に近ければ、単元のなかの 1 時間において単発的に少ない回数で CLIL 教育を行うことになり、Heavy に近ければ 1 つの単元において定期的に、かつ多くの回数で CLIL 教育を行うことになる。比重は、Partial と Total に分類することができる。Partial に近ければ 1 時間の授業のなかの一部分で CLIL 教育を行うことになり、Total に近ければ授業のすべてを CLIL 教育

で行うことになる。使用言語はBilingualとMonolingualに分類することができ、Bilingualに近ければ英語と日本語を織り交ぜた授業を行い、Monolingualに近ければ日本語を使わずにすべて英語で授業を行うことになる。

山野・櫻井(2015)において注意すべき点は、Bilingualに近い授業を構成する際、英語で話した内容をただ日本語に訳すのではないと示されている点である。また、生徒の英語の学習状況などに合わせて日本語を織り交ぜながら授業を進めていくことも大切であると述べられている。つまりCLIL教育は、目的、頻度・回数、比重、使用言語の4つの観点における選択肢の組み合わせに高い柔軟性が許されており、生徒の実態に応じて外国語教育を行えることがわかる。

3. 研究課題とリサーチクエスチョン

これまでCLIL教育の特徴や指導原理、タイプの分類についてその概要を述べてきた。その内容に基づけば、CLIL教育を用いて行う授業は『中学校学習指導要領外国語編』の目標に準じていることがわかる。また学習指導要領にキーワードとして挙げられている「教科横断的な授業づくり」、「即興的なコミュニケーションの促進」、「4技能を統合した高度な言語活動の導入」等の取組みもCLIL教育の内容に合致していることから、中学校英語科においてCLIL教育を実践することに意義あることは明らかと言えよう。

しかし一方で、実際の学校現場では、どのようなタイプのCLIL教育が効果的であるのか、またそれにより生徒の英語に対する意識にどのように変化が生じるのかは明確に理解されていない。これらの点は、現在のCLIL教育の実践に関して、残された解決すべき課題であるように思われる。

そこで本研究は、中学校英語科においてどのようなタイプのCLIL教育が効果的であるのか、また、それにより生徒の英語に対する意識にはどのように変化が生じるのかを明らかにする。この2点は、本研究のリサーチクエスチョンと位置づけられることから(3)に明記しておく。

- (3) a. 中学校英語科において効果的なCLIL教育とは、どのようなタイプのCLIL教育であるのか
- b. CLIL教育を取り入れた授業を行うことによって、生徒の英語に対する意識にはどのような変化が生じるのか

次節以降、これらリサーチクエスチョンに関する実践研究の方法、研究対象、分析、考察を試みる。

4. 研究方法と対象

本研究では、長崎市立N中学校にてCLIL教育を用いた授業実践を行った。対象は第二学年全4クラスの生徒で、単元は、言語材料として、不定詞の名詞的用法、

形容詞的用法、副詞的用法を扱った。本実践授業では、文部科学省検定教科書である『NEW HORIZON English Course 2』東京書籍(2020)を用いた。単元を通して技術・家庭科やその他の内容を取り入れた英語の授業を行うことを試み、そのなかで、CLIL教育のタイプの分類に関わる頻度・回数は Heavy に設定し、比重については、生徒が他教科、他領域の内容にも思考を広げることができるように Total に設定した。使用言語は、生徒の実態を踏まえて Bilingual に設定した。また、リサーチクエスション(3a)を明らかにするために、目的に焦点を置いた上で対照実験を行い、毎回の授業で用いたワークシートに書かれていた感想やコメントの分析を行った。

授業は、全6時間のなかに AI や情報技術、SDGs 等の内容を取り入れて行った。その際、『中学校学習指導要領外国語編』の目標や CLIL 教育の指導原理等に沿って授業案を作成した。1 時間目の授業においては単元の導入として全クラス同様の授業を行った。2 時間目以降は対照実験としての授業実践を行った。その際、CLIL 教育のタイプの分類における目的を Soft と Hard で区別して行った。目的を Soft に設定した授業においては、言語活動を行う前に、言語形式(文法)について説明をすると同時に簡単な例文をいくつか作るなどの練習を取り入れて、生徒が言語形式を意識できるようにした。一方、目的を Hard に設定した授業においては、言語活動を行う前の言語形式(文法)に関する説明を最小限にとどめ、言語活動への移行を促した。さらに T・T(Team Teaching)の有無を設け、T・T 有りの場合には、生徒の活動の時間にサポートを行うようにすることで、T・T によるサポートの効果も測ることとした。

また、リサーチクエスション(3b)に挙げたとおり、CLIL 教育を用いた授業を受ける前と受けた後での生徒の英語に対する意識の変化を調査するために、第二学年全4クラスを対象に事前と事後の2回に分けてアンケート調査を行った。なお、事前アンケート及び事後アンケートにおいては選択回答と記述回答を採用した。

5. 結果・考察

5.1 ワークシートをもとにした考察

毎回の授業で用いたワークシートに書かれていた感想やコメントを、授業に取り入れたテーマに関するものと、本時に学習した文法やその他の英語を用いた表現に関するものの二種類に分けて考察した。対照実験としての授業実践においては、目的を Soft と Hard に区別していたため、目的の違いとの関連も含めて、出現頻度に関する考察を行った。

授業に取り入れた内容に関するワークシートの分析結果と英語を用いた表現に関するワークシートの分析結果をまとめると次のようになる。

表 1 回数の合計

	目的を Soft に設定した際 の出現回数	目的を Hard に設定した 際の出現回数
授業に取り入れた内容 に関する記述	77 回	78 回
英語を用いた表現 に関する記述	98 回	94 回

授業に取り入れた内容に関する記述の回数と英語を用いた表現に関する記述の回数を比較すると、全体としてわずかな差しか見られず、リサーチクエスチョン(3a)を明らかにする具体的なデータは得られなかった。その要因は、次の点にあると考えられる。まず、今回行った授業では、CLIL 教育のタイプの分類における比重を Total と設定したこと、次に、目的を Soft と Hard と設定した両方の授業において、1 時間の授業すべてを CLIL 教育を用いて行ったため、Soft と Hard の明確な違いをつくることができなかつたことである。

さらに、フィッシャーの直接確率検定 (Fisher's exact test) の結果、目的を Soft に設定した授業と Hard に設定した授業において集計した結果の比率に有意な差があるとはいえず、データの信頼性を示すことができなかつた。しかし、全体として授業に取り入れた内容に関する記述の回数と英語を用いた表現に関する記述の回数に大きな差が表れていないということは、授業に取り入れた内容と英語を用いた表現の両方を生徒に意識づけることはできたと考えられる。

5.2 アンケート結果をもとにした考察

授業の前（事前）と授業の後（事後）の 2 回に分けて行ったアンケート調査の結果について考察する。選択回答によるアンケート結果の考察に用いたデータは、事前と事後の結果についてクロス集計を行い、ウィルコクソン (Wilcoxon) の順位和検定で有意な差があると判定されたデータを用いて行うこととした。記述回答によるアンケート結果については、出現頻度が高かつた単語を組み合わせることで生徒の思考や意識を推察するテキストマイニング法で集計を行った。これらの調査をもとにすると、リサーチクエスチョン(3b)に対する結果は以下のようにまとめることができる。

- (4) a. 身近な話題について、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合っているという意識の向上
- b. 特に話すことについては即興的なやりとりができるようになり、書くことについてはまとまりのある文章を書くことができるようになったという意識の向上
- c. 英語が得意、友だちとやりとりするのが楽しいといった前向きな意識か

ら、英語が好きだと感じる生徒の増加

d. 英文のつくりやすさへの興味・関心の高まり

上記結果のうち、(4c)に示した結果は、クロームブックでの調べ学習、映像や動画などの視覚情報の活用によって理解が深まったことが要因として挙げられる。さらに、英語が好きだと感じる生徒が増加したことにより、これからも頑張っ英語を勉強していきたいという学習意欲が向上したと考えられる。

(4a)～(4d)を通して見ると、CLIL 教育を用いた授業は、生徒の活動・内容に対する意識や英語そのものに対する興味・関心、学習に対する意欲を向上させ、さらに生徒が世界に目を向けてものごとを考える契機になったと考えられる。

5.3 CLIL 教育を用いた授業づくりと評価方法のモデル

本実践研究をもとに、CLIL 教育を用いて授業づくりを行う際の手順と評価方法を検討してみると、次のモデルを提案可能である。

図2 CLIL 教育における評価方法のモデル

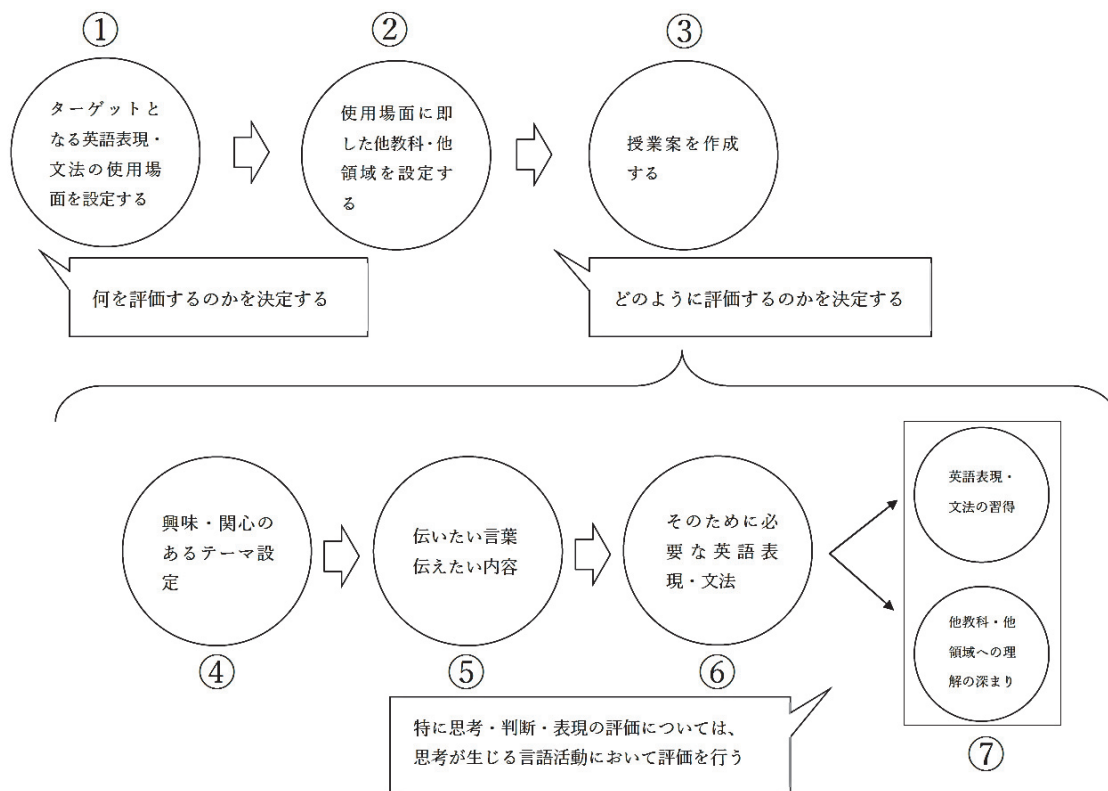


図2に示したように、授業づくりの手順は大きく7つに分けられる。まず、①本時のターゲットとなる英語表現・文法(以下、「言語材料」と呼ぶ)の使用場面を設定する。その際は、実生活での場面や他教科・他領域での活用場面などを具体的に設定する。次に②では、①で設定した具体的な使用場面に即した他教科・他

領域を設定する。その際、授業に取り入れる他教科の内容は未習事項ではなく既習事項を取り入れる。③では本時の授業案を作成する。その際、④～⑦の流れとなるように授業案を作成する。

続いて④では、生徒が興味・関心のあるテーマを設定する。ここでは、②で設定した他教科・他領域の中でも特に生徒の知的好奇心を引き出すようなテーマを選択したり、題材の提示方法を検討したりする。⑤では、生徒に伝えたい言葉、伝えたい内容を考えさせる。興味・関心のあるテーマをもとに、生徒自身が伝えたい言葉や伝えたい内容を考えるよう促す。そのために必要な「言語材料」への気づきを⑥で促す。さらに⑥で考えた伝えたい言葉や伝えたい内容をどのようにしたら相手に伝えることができるのかを考える中で、伝達に必要な「言語材料」に気づくようにする。その際、生徒が必要だと感じる「言語材料」と、本時のターゲットとなる「言語材料」が一致するよう促す。⑥で必要な「言語材料」に気づき、段階的な言語活動を通して「言語材料」の習得を目指す。⑦では、「言語材料」の習得と他教科・他領域への理解の深まりの両方を最終目標とする。さらに、無理のない範囲で授業に取り入れた内容についても理解を深めることができるようにする。こうして①～⑦の手順で CLIL 教育を用いた授業を構成する際には、常に CLIL 教育の 4 つの C と本時の授業の関わりや CLIL 教育のタイプの分類を念頭に置いておく必要がある。

CLIL 教育を用いた授業を行う利点は、「言語材料」を使う必然性のある場面を他教科・他領域の内容に当てはめ、内容と形式を一致させることができるという点である。したがって、ターゲットとなる「言語材料」を軸として、他教科・他領域のさまざまな文脈の中で学びを深めることができるよう心がけたい。

また評価方法については、単元の目標を設定した後に何を評価するのかを決定し、ターゲットとなる英語表現・文法の使用場面を設定する。その際、表 2 に挙げる 5 つの領域と 3 つの観点から評価項目を決定する必要がある。

表 2 5 つの領域と 3 つの観点からなる評価項目

	聞くこと	読むこと	話すこと [やりとり]	話すこと [発表]	書くこと
知識・技能	①	②	③	④	⑤
思考・判断・ 表現	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
主体的に学習 に 取り組む態度	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮

表 2 に示した評価項目を用いて、ある単元において、①聞くことの知識・技能を評価する、あるいは⑧話すこと [やりとり] の思考・判断・表現を評価する、というように、何を評価するかを決定した場合に、学期終了時に評価をしていない項目がないよう、5つの領域と3つの観点からなる評価項目の評価をバランスよく行うように心がけたい。

CLIL 教育は、学習の目的を Hard と Soft に設定するなどして、「言語材料」の習得と他教科・他領域への理解を深めることを最終目標としている。しかし評価の際は、他教科・他領域に関する内容を評価するのではなく、生徒が用いる英語表現等に注目して評価を行うことを忘れてはならない。また、使用場面に即した他教科・他領域の内容を設定し、授業における生徒の思考を具体的に想像した上で、どのように評価するのかを決定する。以下に評価方法の具体案を示す。

表 3 評価方法の具体案

	具体的な評価方法
知識・技能	ペーパーテストにより事実に関わる知識を問う問題や知識の概念的な理解を問う問題、文章やポスター等を用いた発表などのパフォーマンステスト等
思考・判断・表現	発表準備、グループでの話し合い、作品の制作や表現、それらを集めたポートフォリオ等
主体的に学習に取り組む態度	ノートやレポート等における記述、授業中の発言、行動観察、生徒による自己評価や相互評価等

表 3 に示した評価方法は、単独で用いるのではなく、多様な方法を取り入れて評価を行うことが重要である。また、主体的に学習に取り組む態度については、生徒による自己評価や相互評価を評価の材料として扱うように心がけたい。

CLIL 教育を用いた授業は、生徒の思考を促すことができるという最大の利点があるため、特に思考・判断・表現における評価が重要であると考えられる。したがって、思考・判断・表現における評価を行う際は、表 3 に示した発表準備、グループでの話し合い、作品の制作や表現等の言語活動の場面に留意して評価を行うように心がけたい。また、思考・判断・表現の評価を行う場面は、思考が生じる言語活動において評価を行うのが望ましいと考えられ、授業の実施後には、観点ごとの総括的評価(A, B, C)を行うのが望ましい。以上が CLIL 教育を用いて英語の授業を行う際の評価方法に関する提案である。

本節では、CLIL 教育における授業づくりの手順と評価方法について検討してきた。最後に付言すると、評価においては、指導と評価の一体化の観点から生徒の学習改善につながるよう留意することと、教師の指導改善にもつながるよう留意

することを心がけたい。

6. 結論

本研究では、CLIL 教育を用いた英語の授業を行うことによって生徒の学習に対する意識の変化を調査したうえで、CLIL 教育を用いた英語授業のモデルを提案し、またその評価方法の提案を試みた。リサーチクエスチョン(3a)に挙げた、中学校英語科において効果的な CLIL 教育とはどのようなタイプの CLIL 教育であるのかは明らかにすることができなかった。しかし、リサーチクエスチョン(3b)に挙げた、CLIL 教育を取り入れた授業を行うことによって、生徒の英語に対する意識にどのような変化が生じるのかについてはその一端を明らかにすることができた。つまり、生徒のなかで、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合っているという意識が向上したことや、英語が得意である、友だちとやりとりするのが楽しい、といった前向きな意識から英語が好きだと思ふ気持ちが派生的に増大したことなどが明らかになった。これらのことから、CLIL 教育を取り入れた英語の授業を行うことの利点が明らかになり、中学校において CLIL 教育を行うことの有用性の一部を示すことができたと考える。また、CLIL 教育を用いた授業づくりの具体的な手順を検討し、その際の評価方法を具体的に提案することを通じて、CLIL 教育を取り入れた英語授業のモデルの構築を試みた。

本研究で明らかにすることができなかった CLIL 教育の効果的なタイプについては、今後 CLIL 教育を取り入れた授業を実践するなかで、生徒の実態に合わせて検討を重ねていきたい。

参考文献

- 内田治(2014).『すぐに使える EXCEL によるアンケートの集計と解析』. 東京図書.
- 笠島準一・阿野幸一・小串雅則・関典明ほか (2020).『NEW HORIZON English Course 2』. 東京書籍.
- 笹島茂・山野有紀(2019).『学びをつなぐ小学校外国語教育の CLIL 実践 「知りたい」「伝え合いたい」「考えたい」を育てる』. 三修社.
- ベネッセ教育総合研究所.「ダイジェスト版 中 3 生の英語に関する調査<2015-2018 継続調査>」https://berd.benesse.jp/up_images/research/Tyu3_Eigo_Keizoku_web_all1.pdf (2022 年 3 月 15 日 アクセス)
- 文部科学省(2017).『中学校学習指導要領解説 外国語編』. 開隆堂.
- 山野有紀・櫻井光太郎(2015).「中学校英語科における CLIL(内容言語統合型学習)の実践と可能性」(未公刊手稿) 宇都宮大学.